

令和2年度 第3回 学校運営協議会

日 時：令和3年2月24日（水）18：00～19：20

場 所：高知県立清水高等学校 会議室

参加者：（委 員）弘田浩三（学校関係者）、岡林賢純（保護者）、新谷英生（地域住民）、
速川志保（地域住民）、福重百合架（地域住民）、田中慎太郎（地域住民）、
久保卓也（地域住民）、宮地秀伸（清水高等学校長）
（学 校）田中修一（全教頭）、泥谷耕二（定教頭）、植田文（事務長）、
近藤卓（主幹教諭）、沖田耕二（教務主任）、田中宝（生徒指導主事）、
小松大介（教職員）

記 録：

〔開会〕 会長あいさつ

- 校長から（学校の現状報告）
 - 前回の協議会（10月5日）直後、土佐清水市長に清水高校存続と寮の設置について協議会での検討状況を報告した。市長からは、「前向きに検討する」とのことであった。
 - 高台移転については、先週プロポーザルがあり業者が決定した。来月から基本設計に入り、夏ごろから実施設計を経た後、実際の建築へと移る。完成は令和6年3月の予定である。令和6年4月から新校舎での学校生活が始まる。その際の新入生は現在の小学校6年生となる。
 - 高校入試での出願者が26名と大変少ない状況である。コロナ禍の中、さまざまな行事が自粛となり、生徒募集にも影響を与えたかもしれない。来年度は、積極的にアピールしたい。
- 学校から（1年間の取組並びに学校評価について説明）

〔協議〕（抜粋）

- 清水高校の進路実績が高くなっていることを改めて認識した。清水高校から国公立大学等多様な進路を実現できるということをもっと広く知ってもらうべきである。
- 自分の希望を実現させるために、土佐清水市外に出ていかざるを得ないと考えている人も多くいる。地元に残って、進路を実現させることができることを多くの人々がもっと知ってほしい。
- 保護者には清水高校に対する固定観念があり、なかなか切りくずできない。若い世代に積極的にアピールする必要がある。各小学校のPTAに働きかけてみればよい

のでは。

- 学校のことを知ってもらうターゲットを中学生に絞るのではなく、小学生も対象に拡大するように考えてみてもいいのではないか。
- 市内のとある小学校の児童はジオガイドができるほどの学習活動を行っている。子どもたちにとって、そこでの学びは一生忘れられないものになろうかと思う。早い段階から地域学習にしっかりと取り組み、地域への愛着を持つことで、一時、市外に出ることはあってもやがて戻ってくることもあるのではないかと思う。ぜひ、学校と地域が一体となった学習を小中高で取り組むべきである。
- 現在、高校で力を入れて取り組んでいるICT教育を中心に、小中高が連携できるシステムづくりを画策している。特に探究学習を核とした系統的な取組ができれば大きな成果を生むのではないかと考えている。
- 市外から土佐清水市で仕事をしたいと希望している人々は、土佐清水の自然に大きな魅力を感じて希望している。その一方、地元の人々はその魅力に気付いていない。土佐清水のよさや魅力を再認識しなければならない。市外の人々が土佐清水の何に惹かれているか知ることが重要である。
- 清水高校の進路実績や学力が向上していること、また卒業生が各界で活躍していることなどをもっと発信しなければならない。市の広報で清水高校の特集を組むなど活用すればいいのでは。
- 早期に自分の進路希望を確立すれば、その実現のために市外の高校に進むことになる。清水高校では将来の夢や進路が未定という層も見受けられるが、逆に言うと、高校でその夢を考えたり、実現に向けて努力したりすることができ、それを魅力の一つと考えることもできるのではないだろうか。
- 高校生活が「楽しい」だけではなく、そこでどのようなことを努力し、どのような力をつけて卒業するかが重要である。清水高校で学ぶことでどのようなことができるようになるかを明確にするべきである。

[閉会]